

## 放射線科・放射線診断学部門(選択)

研修科	放射線科・放射線診断学部門(選択)	
責任者	教授	氏名 石井 一成
指導医数	4	名
研修期間	4	週間 ~ 8 週間
受入可能人数	3	名
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プライマリ・ケアに必要な画像診断の知識と技術を修得し、基本的な読影ができる。</li> <li>2. 救急外来・当直に必要な画像診断の知識と技術を修得し、基本的な読影ができる。</li> <li>3. 各種画像診断の特徴を理解し、病態に応じた検査の選択と優先順位が決定できる。</li> </ol>	
行動目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基本的な画像の理解 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 胸・腹部単純写真の基本的読影が出来る。</li> <li>2) 頭部単純CTで頭蓋内出血病変の鑑別が出来る。</li> <li>3) 胸・腹部CT・MRIで、正常解剖が理解でき、代表的疾患を診断できる。</li> </ol> </li> <li>2. 基本的な検査手技の習得 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 各疾患の診断に関して適切な画像診断を選択できる。</li> <li>2) 単純写真の撮影原理・体位を理解し、病態に応じ必要な撮影方法を指示できる。</li> <li>3) 各種画像検査における患者の流れを理解する。</li> <li>4) 造影検査の適応と禁忌を理解する。</li> <li>5) 造影剤の急速静注に耐える血管確保ができ、副作用に対する十分な配慮と対応ができる。</li> <li>6) 患者の質問に応じ説明することにより、患者の不安感を和らげることができる。</li> <li>7) 超音波検査での正常解剖の理解と各臓器の抽出ができる。</li> </ol> </li> </ol>	

<p>方略 (LS)</p>	<p>1. 指導医と一緒に各種の画像検査を担当し、患者への対応と医療面接、造影剤の適応と禁忌、また、病態に応じた適切な検査方法について研修する。</p> <p>2. 研修医自らが各種画像検査の一次読影レポートを作成し、画像診断について研修する。</p>
<p>評価 (EV)</p>	<p>研修医が到達目標を達成しているかどうかは、各分野・診療科のローテーション終了時に、医師及び医師以外の医療職が別添の研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを用いて評価し、評価票は研修管理委員会で保管する。医師以外の医療職には、看護師を含むことが望ましい。</p> <p>上記評価の結果を踏まえて、少なくとも年2回、プログラム責任者・研修管理委員会委員が、研修医に対して形成的評価(フィードバック)を行う。</p> <p>2年間の研修終了時に、研修管理委員会において、研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを勘案して作成される「臨床研修の目標の達成度判定票」を用いて、到達目標の達成状況について評価する。</p> <p>研修医評価票</p> <p>Ⅰ. 「A. 医師としての基本的価値観(プロフェッショナリズム)」に関する評価</p> <p>A-1. 社会的使命と公衆衛生への寄与 A-2. 利他的な態度 A-3. 人間性の尊重 A-4. 自らを高める姿勢</p> <p>Ⅱ. 「B. 資質・能力」に関する評価</p> <p>B-1. 医学・医療における倫理性 B-2. 医学知識と問題対応能力 B-3. 診療技能と患者ケア B-4. コミュニケーション能力 B-5. チーム医療の実践 B-6. 医療の質と安全の管理 B-7. 社会における医療の実践 B-8. 科学的探究 B-9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢</p> <p>Ⅲ. 「C. 基本的診療業務」に関する評価</p> <p>C-1. 一般外来診療 C-2. 病棟診療 C-3. 初期救急対応 C-4. 地域医療</p>
<p>責任者からの一言</p>	<p>CT、MRI、核医学(PETを含む)、IVRなどの放射線診断学は、急速に進歩しており、診療の中で放射線診断学の果たす役割はますます大きくなっている。放射線診断学の実力をつけて患者さんの診断・治療に貢献できるような医師になる糸口を提供することが、この研修プログラムの目標のひとつである。放射線診断学に関して医師として一生役立つことが学べるはずである。将来放射線診断医を志す方も、そうでない方も、このプログラム期間の1か月ないし2か月間、放射線診断学に専念できるのは意義あることだと思います。</p> <p>カンファレンスや共同研究を通じて各診療科との連携を図ることによって、医療全般のレベルが向上します。研修プログラムを通じて、放射線診断学の楽しさを知り、更なる医療の発展を目指して、私たちと一緒に、新しい放射線診断学の可能性に挑戦してもらいたいと考えています。</p>